

人間と機械の調和を目指して

若者が新しい価値創造を目指して自然科学の分野でチャレンジすることを助成する当立石科学技術振興財団は、単に結果に対して賞を与えるのとはひと味違う素晴らしい取り組みだと思う。

結果に対して評価するのは比較的簡単だが、これから取り組む先進的な研究に対して適切に評価する事は至難の業と言えよう。だからこそ評価の対象は、その中味以上にその人の志の高さ、具体的には世の中のどんな役に立ちたいというレベルの高さに注目すべきだと言える。なぜなら分野が違えば中味は当然異質のものになるが、インパクトの大きさは相応の共感を万人に与えるからである。



若い時は相対的に世の中の事は考えずに自ずと湧き上がる自然現象への興味が研究者の動機となるが、成長と共に社会との関連を意識するようになる。研究を進めるといのは、その成果がどんなインパクトを社会に対して与えるのかの検証の過程であるとも言える。正に当財団はそのことを「人間と機械の調和」という財団趣意の中で明確に位置付けている。考えてみれば自然の究明は最終的に人の役に立たないといけないのに、研究そのものに目を奪われ少しずつ本来の目的を離れ研究のための研究ということに成りがちな行為を、当財団に応募する人が自ら見直してくれることに役立っているとしたら大いに嬉しい事である。

最近、ひとつの研究成果が直ちに世の中の役に立つ結果につながり難しくなっている。個別の技術が世界中に通用するものよりも、社会の取り組み、人と社会の関わりの中で新しい価値を創造することを求めるニーズが高くなっている。自分の研究が成功した時にどのような社会が造れるのかを大局的な視点で考え、場合によってはチームを作って多面的に取り組む事が求められる時代になりつつある。

当財団が毎年行っている助成金贈呈式では、いろんな分野の研究者が一堂に集い研究の目的と実現手段についての発表と議論が行われているが、その中から新しい取り組みや協創チームが生まれてくれば幸いである。

株式会社オプトクエスト顧問 山下 牧（評議員）